

絶倫彼氏の合法焦らしプレイで

知らないうちに身体の奥から書き換えられてしまった話【体験版】



絶倫彼の合注焦らしプレイで
知らぬうちに身体の奥から書き換えられてしまった話



画像はPixAIで作成しています

【本作をお読みいただく前に】

本作はフィクションです。登場人物はすべて成人です。

実在の人物・団体とは一切関係ありません。

【過激な描写に関するご注意】

一部、過激な性描写（ポルチオ・羞恥・調教的な関係性）を含んでおります。

シチュエーションおよび、過激な性描写が苦手な方は、閲覧をお控えいただくか、十分ご注意の上でお楽しみいただけますようお願いいたします。

登場人物紹介

・篠原 智樹（しのはらともき）

琴乃の大学時代のサークルの先輩。

当時から優しくて誰からも好かれる好青年。爽やかな見た目とは反対に実は絶倫で、そのことを知っているのは琴乃のみ。

・三田 琴乃（みた ことの）

智樹の後輩。

卒業後のサークル同窓会で智樹と再会し、付き合って同棲へ。性欲は強めだが、智樹の絶倫には悩まされている。そこである提案を持ちかけるのだが——！？

1、優しすぎる（？）先輩彼氏と、涙の「限界」直談判

先輩のことが好きだ。大好きだ。大学のサークル時代からずっと、憧れていた。

だから、サークルの同窓会で再会して、告白をして、付き合った。

今では同棲もしていて、幸せだ。

でも――。

「――…の、琴乃」

先輩の声が聞こえる。みたことの三田琴乃は目を開けた。どうやら、あまりの快楽に一瞬気を失っていたようだ。

「琴乃、起きて。可愛い顔見せて？」

視界いっぱい広がっていたのは大好きな先輩――篠原智樹しのはらともきの甘ったるい笑顔。

「あ、せんぱ……っ……んあっ」

「ねえ琴乃、気絶してる暇なんてないよ。まだ全然足りないんだから」

琴乃は下腹部の奥深くにぐにりと突き立てられた智樹の熱杭に、悶絶するように背中を逸らせた。

智樹の太く凶悪な熱杭が、琴乃の一番柔らかい奥の壁を押し広げ、ぐちゅぐちゅと粘ついた音を立てて膣内を掻き回している。

「……っ、先輩、抜いてください……もう無理です、無理……いやあ……!!」

「なに言ってるの？ 琴乃はまだ五回しかイってないでしょう？ ほら、下のお口の方が素直で偉いよ、よだれをこんなに垂らして……音聞こえる?」

聞こえないわけではない。

智樹の大きな分身に貫かれるたびに、琴乃の奥からは潤滑液が卑猥な音を立てながらじゅぶじゅぶと出てくる。智樹の熱量は一晚中萎えることがない。下手をしなくても、毎夜のごとく朝まで抱きつぶされるのだ。

（先輩が、こんなに絶倫だなんて……知らなかった……！）

琴乃が懇願しても、智樹はにこにこしながら腰を動かした。智樹の肉棒に慣れきってしまった身体は、快楽に敏感になりすぎていて、少しの刺激で絶頂してしまう。

「せんぱい、先輩……イくからっ~~~~~」

「いいよ。もっと奥でイって」

唇を塞がれ、上顎を彼の舌がなぞっていった時には、琴乃の身体がぎゅうっと引き絞られる。智樹の熱を咥え込んだまま、全身を震わせながら果てる。

「えらいね、きちんとイけて。今夜はあと何回イけるかな？」

呼吸をするのがやっとだった。逃げようと身をよじっても、智樹が与えてくる、とめどない快楽から逃げる術などない。

「いや、もう嫌……やだ……何回もイってるのに……！」

「ヤダじゃない、好きでしょ？ 気持ちいいね、琴乃？」

「や、やだ……んあ……！」

「俺に抱きつぶされるの、大好きだよ。ねえ、琴乃？」

（だめ、ダメだこれじゃ……先輩にぜんぶ、壊される……！）

身体を中心に身勝手に貫かれ続け、結局その日も、智樹の熱に溶かされるようにして意識を手放したのだった。



「ごめんね、琴乃」

翌朝、智樹は困った顔をしながら琴乃を甘いキスで起こした。

「琴乃が可愛くて、つい加減ができなくなっちゃうんだ……身体痛くない？」

「……………大丈夫、です」

「よかった。朝食にベーグルサンド作ってくる。ゆっくり準備して」

頭や首筋にたくさんキスをしてから、智樹は爽やかすぎる眩しい笑顔で寢室を出ていく。

その後姿を見送りながら半身を起こし、琴乃はため息を吐いた。

「……………なんで、あんなに一晩中激しくしておいて、朝から爽やかイケメンすぎるんだろ……？」

付き合った時には知る由もなかった、先輩彼氏の裏の顔。

それは——爽やかな好青年の皮をかぶった、**体力お化けの絶倫巨根**という、誰にも言えない秘密だった。

週に三回で済めば御の字。少し気を抜くと平気で五日間連続で求められる。同棲すれば落ち着くかと思いきや、むしろ頻度が増した気すらする。

正直、琴乃は完全に彼の性欲を舐めていた。憧れの人と繋がれるならへっちゃらだと高をくくっていたのだ。

（先輩と付き合えただけじゃなくて、エッチまでできるなんて夢みたいって喜んでたのに……このままじゃ、本当に命がもたない……!）

立ち上がろうとすると、昨晚注ぎ込まれた智樹の体液が股間から溢れてきた。そのどろりとした感触にさえ身体が反9
応する。

「……っ……」

慌てて浴室に飛び込み、シャワーを浴びながら自分で掻き出す。昨晚の続きと勘違いした身体に、ゾクゾクとした快楽が昇り詰めてくる。

「綺麗にしてるだけなのに……!」

ぎゅつと膂肉が締まる。そのまま琴乃は果ててしまい、そして腰に残る鈍痛に息を止めた。

ズキズキと痛む腰をさすりながら、琴乃は固く決意した。

（このまま先輩のペースに巻き込まれ続けたら、物理的に身体が壊れちゃう……!）

ちゃんと自分の口から拒絶……いや、『お願い』をしなければ。

トントン、と軽快な包丁の音が響くキッチンへ向かう。

強気でいかねばと思っていたのに、エプロン姿で朝食を作ってくれている智樹の背中を見ると、胸がキュンとなった。サークル時代から憧れていた通り、優しくて頼もしい理想の先輩そのものだ。

だが、腰の痛みにハツとする。琴乃は意を決して智樹の隣に立つ。

「あの……先輩」

恐る恐る声をかけると、智樹は眩しいほどの笑顔を向けてきた。

「どうしたの？ お腹空いた？ もうちょっと待てる？」

「あ、えっと……そうじゃなくて……その……」

智樹の優しげな瞳に見つめられると、途端に言葉に詰まってしまふ。こんな素敵な彼氏はいない。甲斐性もあつて、優しくて、誰にでも慕われていて平等でイケメン。

本当に優しいのだ。夜とあの凶悪な分身以外は。

だから、もう少し性欲を抑えてほしいなんて言つて嫌われたくない。けれど、自分の身体の命運がかかっているのだ。琴乃はぐつと両手を握りしめると、上目遣いで必死に訴えかけた。

「あのね、先輩……先輩にたくさん抱いてもらえるの、本当に幸せなんだけど……っ」

「うん、俺も琴乃と繋がれて嬉しいよ」

「そんな、でも……でも……」

琴乃の様子がいつもと違うことに気付いたのか、智樹は包丁を置くところらに向き合つて視線を合わせてくる。大学時代から変わらない、優しい先輩の姿に胸がいっぱいになった。

「琴乃、言いたいことがあるなら聞くから言って？」

肩に手を置かれ、琴乃は唇をかみしめたあと智樹の目を見つめた。

「本当に……本当に身体が追いつかなくて……っ。毎晩限界までイカされると、仕事中も腰が抜けちゃいそうで……」
琴乃は泣きそうになりながら、彼のエプロンの裾をぎゅっと掴んだ。こんなことをお願いして、面倒だなんて思われたくはない。でも、もう限界だ。腰も足も痛いし、睡眠不足が続いている。

「だから……お願いします。エッチは毎晩じゃなくて……オナニーするとか、少し間を空けるか……それか、なるべくおかわりなしの一回で終わらせてほしいですっ！ 自分勝手でごめんなさい……！」

言い切った瞬間、ギョツと目を瞑る。

怒られるかもしれない、嫌われるかもしれないという恐怖で心臓がバクバクと鳴り響いた。

けれど、返ってきたのは、拍子抜けするほど柔らかな智樹の手のひらだった。ポン、と優しく頭を撫でられて、琴乃は目を開ける。目の前には、心底申し訳なさそうな、困り果てたような智樹の顔があった。

「ごめんね。俺、琴乃が可愛すぎて、自分の気持ちばかり押し付けていたんだね。つらい思いさせて、本当にごめん。言うのつらかったよね？」

「せ、先輩……っ」

「これからちゃんと、琴乃のペースに合わせるよ。約束する」

智樹は優しく琴乃を抱きしめ、片膝をつくと誓うようなキスを手の甲にしてくれた。

そのあまりにも誠実で優しい対応に、琴乃の緊張は一気に解け去った。

（よかった……！　ちゃんと話せばわかってくれる、やっぱり優しい智樹先輩のままだ……！）

ホッと胸を撫で下ろし、琴乃は智樹の胸に顔をうずめた。

「先輩、ありがとう。大好きです」

「俺もだよ。これからもっともっと大事にするね」

甘い言葉と優しく抱きしめてくれる両腕に安心していた。だからこそ、琴乃はまったく気付いていなかった。

自分を抱きしめている智樹の瞳が、うつすらと細められたことを。

「……これからは、琴乃のことを一番に考えて行動するね」

嬉しくて琴乃は智樹に抱き着いて頷いていた。

2、抜き去られた熱

「ちゃんとお願ひして、本当によかった……」

智樹と『ペースを落とす』『するときは一回で』と約束を交わした日の夜。

琴乃は自分のベッドの上で、久々に心からゆつたりとした心地でシーツに身を沈めていた。

いつもなら、この時間にはすでに智樹の凶悪な肉欲に貫かれ、シーツを掻き抱きながら「やだ」「もう無理」と泣き叫んでいる頃だ。

けれど今夜は違う。智樹はリビングで静かにパソコンを開いて仕事をこなしており、ベッドルームには穏やかな時間が流れていた。

（やっぱり、先輩はちゃんと私の身体のこと、考えてくれてるんだ……！）

拒絶されるかもしれないと恐れていたのが、嘘みたいだった。穏やかで快適な心地に胸が温くなる。

サークル時代、智樹は誰にでも公平で、困っている後輩がいれば真っ先に手を差し伸べてくれた。見た目も爽やかで格好よく、たくさん告白されていたのを知っている。

琴乃にとって、智樹は憧れの先輩であり、手に入るような人ではなかった。陰からこっそり見ていけばよかったし、たまたま同じサークルに入れたからこそ近くにいられて幸せだった。

告白が成功して付き合えた今でも、時々、本当に自分の彼氏が、あの人気者の智樹先輩なのかと疑いたくなる。

(あの時はまだ学生だったし、盲目的になつていたかもしれないけれど……)

社会人になつてからたくさんの人を見てきたが、智樹以上に素敵な人はいなかった。

彼の誠実さは、二人きりの恋人同士になつた今でも何一つ変わっていない。それが琴乃の心を温かくした。

「……琴乃、まだ起きてる？」

うとうとしていると、寢室のドアが静かに開き、智樹がひょっこりと顔を出した。

「はい、でももう寝ようと思つてて……」

「そっか。俺もそろそろ寝ようかなつて」

智樹は部屋の明かりを落とし、ベッドへ潜り込んでくる。ふわりと漂う、彼特有の爽やかな香りとかすかな体温に、琴乃の胸はキュンと跳ね上がった。

「先輩、お仕事終わつたんですか？」

「うん。琴乃が待ってる気配がしたから、急いで片付けてきた」

そう言って、智樹は琴乃の頭を優しく撫で、額にちゅつと軽いキスを落とした。

そのままゆつくりと琴乃の身体の上に覆いかぶさってくる。重みと温もりが重なり合い、琴乃は自然と智樹の首に手を回した。

「……あのね、琴乃。約束通り、今夜はちゃんと一回だけにするから、お願い。ダメ？」

「あ……はいっ……！」

智樹の優しい眼差しに見つめられ、琴乃は素直に頷いた。

（一回だけなら……身体も痛くならないし、ちゃんと気持ちいいまま眠れるはず）

安心感に包まれた琴乃のパジャマのボタンを、智樹の長い指がひとつずつ丁寧に外していく。

いつも優しいが、今夜の手つきも驚くほど優しく繊細だ。ブラジャーのホックが外され、露出した胸の先端に智樹の温かい唇が吸い付く。

「んあ……っ、ふ……あ……っ」

舌先でカリカリと突かれ、ちゅう、と音を立てて吸い上げられるたび、背筋を甘い痺れが駆け抜けた。

「可愛い、琴乃……もっと声聞かせて」

股間の奥が湿り気を帯びて疼き始める。ただ愛撫されているだけなのに、琴乃の下腹部は急速に熱を帯びていった。

「……もうこんなに熱くなってる。可愛いね」

智樹の指が、下着の隙間から秘めた場所へ潜り込んできた。くちゅ、といやらしい音が聞こえる。すでに蜜でドロドロに濡れそぼっていたクリトリスを、智樹の指が優しく円を描くように撫で回していく。

「あ、あ……んっ！　そこ……っ、ああっ！」

「ふふ、琴乃の可愛い声、全部聞かせて？」

優しく、けれど確実に快感を食うような愛撫に、快楽が昇り詰めてくる。

智樹は琴乃の身体の弱点を熟知していた。弱く叩かれ、滑らされる指の動きだけで、琴乃の腰はガクガクと震え始める。

智樹は下着を膝まで引き下げると、ずっしりと重みのある自身の熱杭を、琴乃の濡れた入口へあてがった。

「じゃあ……挿れるね」

「あ……先輩……入っ、てくださいい……っ」

ゆっくりと、自分の身体を中心に押し広げられる感覚がした。

体験版はここまでです。

続きは製品版で

お楽しみください。

